

聖書：コリント人への手紙第一 2：6～9

説教題：隠された神の知恵

日時：2022年2月6日（朝拝）

パウロはこの手紙の本論に入ってまずコリント教会に生じていた分派の問題を取り扱っています。コリント人たちは、1章12節で見ましたように、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」と言って争っていました。パウロは、彼らのしていることはこの世の知恵に従って自分たちを誇っていることだと述べています。コリントの町があるギリシャの世界では知識や知恵、雄弁術が高く評価され、もてはやされていました。その世の価値観を教会の中に持ち込んでいるところに問題の根があると彼は言います。そして教会はこの世の知恵によって建てられたところではないことを述べて来ました。まず福音そのものが世の知恵とぶつかります。福音はこの世が愚かと断じる十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。次に現実のコリント教会も世の知恵によって建て上げられていません。そのことは教会の構成メンバーを見れば分かります。そして前回の2章1～5節では、コリントで宣教したパウロもこの世の知恵の言葉を述べたのではなかったこと、むしろ十字架につけられたキリストの宣教によって神の力が働き、コリント人たちが回心へ導かれたことを述べました。

さてこのように知恵の言葉を用いないと語って来たパウロですが、今日の6節で「しかし私たちは、・・・知恵を語ります」と言います。ここからパウロは2種類の知恵について語っていることが分かります。一つはこの世の知恵です。パウロはこれを用いず、これにより頼まなかったと言って来ました。しかしこのことはパウロが「知恵」というものを全く否定しているという意味ではありません。まことの知恵というものがあります。それは7節から分かりますように、神の知恵です。まずこの6節で私たちが気になるのは「成熟した人たち」とは誰を指すのだろうかということではないでしょうか。ここは第3版までは「成人の間で」と訳されていました。ギリシャ語の字義的な意味は「目標に達した人」というものです。これは一見、クリスチャンの中には成熟した人たちとそうでない人たちがいるということを前提にした言葉のようにも受け取れます。しかしパウロはクリスチャンをそのように2つのグループに分けて、よりレベルの高い人たちの間でだけ神の知恵を語ると言っているわけではありません。この知恵は、この後を見ると分かりますように、クリスチャン全体に分かち

合われているものです。信者が今やみな知っているものです。ですからパウロはクリスチャン全体を指して「成熟した人」と言っていると考えられます。おそらくパウロがこの言葉を使ったのは、コリント人たちがこの言葉を好んで自分たちに当てはめて使っていたからではないかと注解者たちは言います。彼らは当時のギリシャ世界の価値観に心が引かれて、「知恵」とか「知識」、「霊的な人間」という言葉とともに、「成熟した人」という言葉も自分たちのエリート意識を表現するために好んで用いていた。しかしパウロは言っているわけです。成熟した人とは、自分を持ち上げ、エリート意識を持ち、他者を見下す人ではない。成熟した人とは神の知恵を受け入れ、そこに示されている十字架につけられたキリストを誇りとし、その方の前に感謝とへりくだりをもって歩む人である、と。この知恵を語る「私たち」とは誰でしょうか。前回2章1～5節でパウロ一人を指して「私」という単数形が使われたのに対して、ここでは「私たちは」と複数形が用いられています。これはパウロも含むクリスチャン全体を指すと考えられます。私たち、主にある者たちの間では、世の知恵ではなく、このまことの知恵、神の知恵こそを互いに語り、話すのだとパウロは言っているわけです。

この知恵について6節後半に「この知恵は、この世の知恵でも、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。」とあります。「この世の知恵」という部分には印がついていて、欄外に別訳として「この時代の」とあります。つまり次の時代が来れば過ぎ去って行く、一時的なものではないという意味です。また「この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵」ともあります。なぜここで支配者たちが言及されているかと言えば、この後の8節で彼ら支配者たちが栄光の主を十字架につけたと言われることと関係するのでしょう。この世の支配者たちは神の知恵を理解しなかった人たちの代表として出て来ます。彼らは率先して、あるいは責任ある立場として、イエスを十字架につけたことが福音書や使徒の働きに繰り返し述べられています。パウロがあえてこの支配者たちに言及しているのは、この人たちは1章26節で述べられた「知者」とか「力ある者」、「身分の高い者」と関連するからでしょう。あるいは1章20節に出て来た「知恵ある者」「学者」「この世の論客」とも関連するからでしょう。コリント人たちは世の中で高い地位を持つ、このような人々と関係を持ち、その栄光にあやかりたいと思っていました。しかし彼らが尊敬するこの世の支配階級にある人たちは真の知恵を知らない人たちの代表です。また彼らは過ぎ去って行く人々です。果たしてそのような人々の知恵を私たちは追い求めるべきなのだろうかというメッセージがここにあると考えられます。

ではクリスチャンが今や知るに至り、互いの間で語るまことの知恵とはどのようなものなのでしょうか。それについて7~8節に言われていることを3つにまとめて見て行きたいと思います。その一つ目はクリスチャンが語る知恵とは「奥義のうちにある、隠された神の知恵」であるということです。奥義という言葉はギリシャ語でムステリオンという言葉で、いわゆる英語のミステリーという言葉に相当します。奥義とかミステリーと言うと、私たちは一般人には理解不能で、ごく一部の人しか知ることのできない秘儀というイメージを持つかもしれませんが、先週も触れました通り、聖書ではそうではありません。これは長い間隠されて来たが、今や時至ってキリストにおいて明らかにされたキリスト教福音のことを指します。エペソ人への手紙3章5節：「この奥義は、前の時代には、今のように人の子らに知らされていませんでしたが、今は御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されています。」あるいはローマ人への手紙の16章25~27節にも、この奥義とは「永遠の神の命令に従い、預言者たちの書を通して今や明らかにされ、すべての異邦人に、信仰の従順をもたらすために知らされた」ものと言われています。ですからこれはクリスチャンが今やみな知っているものです。公開されているものです。ただ福音を受け入れない人たちにとってはなお隠された状態にあるもの、なおミステリー、謎と言えるものです。

2つ目は、この知恵は「神が私たちの栄光のために、世界の始まる前から定めておられたもの」ということです。この神の知恵は、神がご自分の卓越さを示し、ご自分を誇るためのものではなく、私たちの栄光という目的をもって定めてくださったものであると言われています。この私たちの栄光とは、信じる者たちが将来あずかる完全な救いを指します。ローマ書5章2節：「このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」同8章30節：「神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。」私たちは神に似る者へ造り変えられて行き、最終的に神の栄光を分かち合っていたいただき、それを豊かに反映する者とされます。そのような私たちの将来の輝かしい救いの完成を神の知恵は目標としています。一方、そのように定めたのは「世界の始まる前から」と言われています。有限な世界に住む私たちにとって気の遠くなるような話です。私たちの頭にうまく収まらないため、めまいを覚えそうになります。しかし聖書がこうして告げているのは、神の知恵は歴史の途中で神が考えた思い付きの

計画ではないということです。何と永遠の昔から神はこのことを計画し、ご自身の内に秘めてくださった。その神の知恵によって今日の私たちはこのように生かされており、またこれからも最後まで導かれるのです。

そして3つ目は8節の「この知恵を、この世の支配者たちは、だれ一人知りませんでした」ということです。「もし知っていたら、決して栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう」と言われています。神がこの世に送ってくださったのは栄光の主です。この「栄光の主」という表現は、聖書の中でここだけにしかないようで、これはキリストをこの上なくたたえる表現となっています。この方はまさに栄光に輝く神ご自身であられる方。そのような方だと分かっていたら、体誰がああ忌むべき十字架につけようとしたのでしょうか。それが自分にとって何を意味するかをもし知っていたら、誰がこの途方もなく恐ろしいことをしたのでしょうか。つまりこの世の支配者たちは誰一人知らなかったのです。ここに神の知恵があることが全く分からなかった。そして神の方ではこのような人間の愚かな行為を通して、ご自身の知恵を実行されました。使徒の働き4章27～28節：「ヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人たちやイスラエルの民とともに、あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、あなたの御手とご計画によって、起こるように前もって定められていたことすべてを行いました。」 この世の知恵の代表であるこの世の支配者たちは、神が送ったキリストを認めず、これを捨てましたが、まさにそのことにおいて、神は人間の知恵の裏をかくようにして、永遠の昔から定めておられた人間の救いに必要なことを実行されました。これはまさに人間にとってミステリー中のミステリー、人間の知恵の思いも及ばないことです。

最後9節に、これは聖書が前もって述べていた通りのことだったとして旧約聖書が引用されています。どの箇所からの引用かを巡って議論がありますが、新改訳の脚注にある通り、イザヤ書64章4節と65章17節を組み合わせたものと見るのが良いかと思います。目や耳や心は私たちが何かを知覚し、理解するために重要な働きをなす器官です。しかし神の知恵はそういった私たち人間の思いや理解をはるかに超えるものです。目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないもの、それを神は、神を愛する者たちに備えてくださった。これは十字架につけられたキリストによる救いを指しています。まさかあのように呪いの木にかけられて処刑された人が、神が送られた私たちの救い主であるとは誰もが考えてもみ

なかったことでした。あの十字架につけられた方が栄光の主であること、神の一人子の御子なる方であるとは誰もが思ってもみななかったことでした。そのお方の十字架を通して信じる者の罪を赦し、その方の徳によって、より頼む者を最後の栄光の状態にまで導いてくださること、それは永遠の昔から神が備えてくださったものであったとは誰一人思いつきもしなかったことでした。しかし神はこのような祝福を、ご自身の知恵により、神を愛する者たちに備えてくださいました。

ここでクリスチャンが「神を愛する者たち」と表現されています。有名なローマ書 8 章 28 節でもクリスチャンがそのように表現されているのを思い起こします。「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」あるいは一番大切な戒めはどれですかと尋ねられた時、イエス様が「心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」および「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という二つの戒めをもって答えられたことも思い起こします。クリスチャンとはこれらの御言葉の通り、神を愛する者たちであると言われていました。もちろん愛は私たちから出るのではなく、神の私たちに対する愛が先です。私たちの神への愛は神の私たちに対する愛への応答です。しかしクリスチャンは今や神の愛を知り、神を愛する者たちです。ここにもコリント人たちへのメッセージがあると考えられます。彼らは自分の知恵や知識を誇り、互いに高ぶり、争っていました。そこには愛が欠けていました。ですから後に愛の章と言われる I コリント 13 章の言葉が語られます。どんな知識に通じていても、愛がないなら無に等しいと言われます。そんな彼らに愛に生きることの重要性をここで語っているということです。神は、神を愛する者たちにこの祝福を備えてくださった。この特性に生きる者であるように！と。

今日は杉並教会の設立 63 周年を記念する礼拝です。私たちは今日の箇所からも、私たちが受けている格別の恵みについて覚えることができると思います。教会はどのようなところかと問うなら、今日の御言葉から、それは隠された神の知恵の現れと言えます。私たちも自分たちを振り返れば、1 章 26 節～31 節で見ましたように、この世の知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。そんな私たちはただ神の恵みによってキリストを知り、キリストにある神の知恵を知る者とされました。また 2 章 1 節からの部分で見ましたように、私たちも十字架につけられたキリストを伝える宣教を通して、今の救いに導き入れられました。ですから

私たちはこの世の知恵に逆戻りするようなことをせず、これからも神の知恵にこそ学び、これに生かされる歩みへ進みたいと思います。「私たちは、成熟した人たちの間では知恵を語ります」とパウロが述べたように、十字架につけられたキリストにおいて明らかに現されている神の知恵こそを互いに語り、また感謝する者でありたいと思います。この世の知恵は過ぎ去るものですが、神の知恵は世界の始まる前から定められたもので、永遠の将来にまで至るものです。目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないもの、このような神の知恵に、私たちはこれからもイエス・キリストにあって豊かに生かされることができます。これを愚かと思わず世の知恵を追い求めて、誇り高ぶり、争う生活ではなく、隠された神の知恵の前でこれを知って益々驚き、益々慰められ、益々喜び、益々感謝して、心から神を愛し、へりくだって神とともに歩む歩みへ進みたいと思います。そしてその私たちの生活と言葉をもって、まことの知恵の素晴らしさを世に証しし、宣べ伝える神の教会の歩みを導かれて行きたいと思います。